

■ 金鉱掘りと長吉 ■

金鉱掘りがいた。長い年月、山を掘り続けた。金は出ない。絶望と戦いながら、発掘を繰り返した。しかし、期待は裏切られ続けた。やがて歳もとり、体力が続かなくなった。ついに諦めることにした。

悄然として郷里に向かった。途中で、出会った1人の青年に、金鉱の失敗を力なく語った。青年は目を輝かして、その話を聞いた。そして、発掘の権利をすぐ譲ってくれと言う。「いいよ」と答えながらも「ムダだよ」と言い添えた。

青年は現場に着いた。さっそく仕事にかかった。わずか一尺ほど掘ったときだった。青年は我が目を疑った。そこには、何と金の鉱脈が微笑みかけているではないか。

3年生の担任をしていた時、受験に向かう生徒にこの話を紹介した。もちろんこれは、青年のように世の中をうまく渡っていきなさいという話ではない。もう一步の所まで来て、成功のチャンスを逃してはならないという戒めである。

これとよく似た話が、日本の昔話にもあることを最近知った。

昔、飛騨の国は乗鞍山の西、沢上（そうれ）に長吉という炭焼きが住んでいた。ある夜、夢枕に老人が現れ、「飛騨高山の味噌買い橋の上に立つと耳寄りなことが聞ける」と告げられる。早速、炭売りがてら高山へ行き、味噌買い橋の上に立った。何日経ってもとんと良い話など聞けず、落胆してしまう。

こうした長吉の様子を見ていた、橋のたもとにある味噌屋の主人が、何をしているのか尋ねた。長吉の話に味噌屋の主人は笑いながら言った。「そんなつまらん夢など早く忘れなせえ。実はワシも同じような夢を見たんじゃ。『沢上の長吉という者の家に杉の木がある。その根元に宝が埋まっている』と言われたよ」。

長吉は一目散に家に帰り、杉の根元を掘ってみた。すると、金銀財宝がざくざく出てきたではないか。

長吉と味噌屋の主人を分けたものは何だろう。どちらにも相応のチャンスはあった。しかし、一方はチャンスをしかと掴み、他方はそれを失ったことすら気づかない。せっかく見た夢に最善の行動が伴ったかどうかで、目の前にある見えないチャンスを掴むことができるかが決まる。

週明けの月曜日は国公立大学2次試験である。対策補習や添削指導に3年生の真剣な勉強が続く。金銀財宝が出るかどうかは分からない。それでも今為すべきことは、夢を信じて最善の行動を尽くすこと、最後の一尺を掘ることである。

参考：「続ことばのご馳走」【金平敬之助】

北海道新聞「味噌買い橋」【中野京子】2012.4.24 夕刊